

東日本大震災被災地

女川町へ職員を派遣してきました



上下水道局では平成23年8月から東日本大震災の被災地を支援するため、宮城県女川町へ職員を10年間派遣してきました。

今回は、令和2年4月から令和3年3月まで最後の派遣となった給排水設備課の中瀬主任のコメントを紹介します。

東日本大震災から10年となる、令和2年4月から令和3年3月までの1年間、宮城県牡鹿郡女川町の建設課水道係で、東日本大震災の復興支援事業に従事しました。

宮城県とは、震災の年の7月にボランティアとして、ここ数年は東北を題材にした舞台作品のファンとしてつながりがあったのですが、この度は仕事として3度目のつながりをいただきました。

派遣された女川町での主な職務は、水道施設に関する工事の監督と、補助金に関する事務手続きでした。震災から10年をむかえる令和2年度は、女川町の水道復旧事業の大きな転換点でした。女川町は震災後にUR都市機構と協定を結び、中心市街地の復興や集落の再建、それらに関連する水道工事などを二人三脚で進めてきました。その結果、令和2年4月にはほとんどの事業が完了し、UR都市機構との協定期間の満了をむかえました。しかし、集落を結ぶ水道管の整備や震災後の応急処置で設置した施設の撤去など一部の工事が残っており、それらは女川町が単独で進めることとなっています。

私が働く川西市では、多くの工事を職員自身が主体となって進めており、私自身も入庁以来工事に関わる業務を担当してきました。そのため女川町では、水道管の布設、不要となった水道施設の撤去などの災害復旧工事や、本土と離島を結ぶ建設中の橋に水道管を設置する工事などを担当し、川西市での経験を活かしながら工事を円滑に進めていくことができました。関連する工事との調整などで、残念ながら7件の工事は来年度以降の完成となってしまいましたが、この1年の業務で、女川町単独で災害復旧工事を進めるための土台作りに貢献できたのではと感じております。そして、川西市から遠く離れた女川の地で、町の職員と全国から集まった職員とで仕事を進めてきた経験は、さまざまな考えに触れられる非常に貴重な経験となりました。

川西市からの職員派遣は私で最後となりますが、女川町と東北地方の復興はこれからも続いていきます。今後も派遣で訪れた私たちが架け橋となり、共に手をつなぎ復興の道のりを歩んできた女川町のことを思い、そして東北地方に賑わいが戻り、広がっていくことを心から願っております。

